

詩篇 82 篇

0 アサフの賛歌

《天の法廷》

1 神は神の会衆の中に立つ。神は神々の真ん中で、さばきを下す。

《告発と判決》

2 いつまでおまえたちは、不正なさばきを行い、悪者どもの顔を立てるのか。セラ

3 弱い者とみなしごのためにさばき、悩む者と乏しい者の権利を認めよ。

4 弱い者と貧しい者とを助け出し、悪者どもの手から救い出せ。

5 彼らは、知らない。また、悟らない。彼らは、暗やみの中を歩き回る。地の基は、ことごとく揺らいでいる。

6 わたしは言った。「おまえたちは神々だ。おまえたちはみな、いと高き方の子らだ。

7 にもかかわらず、おまえたちは、人のように死に、君主たちのひとりのように倒れよう。」

《まことの審き主》

8 神よ。立ち上がって、地をさばいてください。まことに、すべての国々はあなたが、ご自分のものとしておられます。

本篇は解釈が難解な詩篇として知られています。その難しさの理由は、1節と6節に出てくる「神々」という表現をどう捉えるかという点にあります。実は、この箇所は主イエスが敵対者への反論の際に用いた聖句でもあるのです。

イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、『わたしは神の子である』とわたしは言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。

(ヨハネ10:34-36)

「神々」が何を指すかについて、いくつかの可能性がありますが、ここでは三つに絞ります。

- ①地上の支配者または裁判官
- ②主権、力、この暗闇の世界の支配者たち (エペソ6:12)
- ③異邦の神々 (多神教の名残)

断定はできませんが、私は②の解釈を支持しています。詩人が思い描いている状況とは、「天の法廷」であり、地上の世界の支配者たちに働きかけている諸悪の霊が全能の神の御前に引き出され、その業が問われているというものでしょう。やや想像しにくい面がありますが、ヨブ記における神とサタンとのやり取りは理解の助けになります。

ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」(ヨブ1:6-7)

ここで言われている「神の子ら」とは「神の使い」のことで、彼らは天上の議会に出席しています。その中には人間に対して悪さをする者も含まれているようです。詩人が持つイメージは螺旋階段のような支配の構図であり、トップに神がおられ、その下に善玉・悪玉が渾然一体となった御使いの集団があり、その下に人間世界の支配者がいて、更にその下に一般庶民の生活があります。2～4節に出てくる「弱い者」「みなしご」「悩む者」「乏しい者」は、戦争、貧困、病気などによって苦しんでいる人々を指すでしょう。地上の政治はいつの世にも不正にまみれ、弱い者が犠牲となっています。神はその原因をつくり出している諸悪の霊を告発し、厳しい判決を下しておられるのです。人間世界に満ちる悪を増長させている者どもの有罪宣告が言い渡されています。

5節の「彼ら」とは、神から叱責を受けた悪しき霊を指すでしょう。しかし、彼らは神のことばを理解することができず、地を正しく裁くよう命ぜられてもその意味を悟ることができません。地上の道徳的基盤は揺らぎ、己の利得ばかりを追い求める人々によって形成される社会では、庶民の心もおかしくなっていきます。

さて、問題の6節ですが、「おまえたちは神々だ。おまえたちはみな、いと高き方の子らだ」とは、神から出た皮肉と考えられます。神から権威を委託された御使いたちであるのに、地の管理を正しく行なえないのです。7節では、神の御心に逆らう者は、天使であったとしても、罪人と同じように滅びへと向かうということが言われています。これは極めて新約的な終末思想です。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。(黙示録20:10)

詩人は最終的に、神ご自身の直接統治を願い求めます。「神よ。立ち上がって、地をさばってください」(8節前半)。このことばは、私たちが主の祈りを締めくくるとき、「国と力と栄とは、限りなく汝のものなればなり」と唱えるのに似ています。人間による歪んだ政治、その根本要因をつくり出している悪の諸力に世界を任せておくことはできません。神の国の支配が全地に満ちることをキリスト者は求めているのです。

「ご自分のものとしておられます」(8節後半)と訳された部分は、アッシリア語の「ふるいにかける」と関係していると言う学者もいます。その解釈に則って訳し直すと「あなたはすべての国々(の民)をふるいにかけます」というニュアンスになり、本篇の内容によく合致するようになります。本篇全体は「審き」に覆われており、最終的に神は、現在は渾然一体となっている善悪をきれいに分け、良いものだけを神の国に残されるということが暗示されているでしょう(マタイ13:36-42「毒麦の譬」、13:47-50「地引網の譬」)。

いずれにせよ、人が神の御前に義とされる基準は「信仰に立っている」ということのみです。私たち個人の心の内にも善と悪は入り混じっていて、自分もまともに神の審きの前に立つならばひとたまりもない存在であることを忘れてはなりません。ただ主イエスの恵みにより、義の衣が着せられたのです。

最後に黙示録最後の章で呼応している「主よ、来りませ」(22:17)を唱えて終わります。主イエスは答えておられます。「しかり。わたしはすぐに来る」(22:20)。